

～男女共同参画社会を考える情報コーナー～

ウィズ ユー

あなたと  
いっしょに

# With you

第10回

「看護婦のオヤジがんばる」の著者で、現在版画家として活躍している藤田健次さんと、子育てのために1年間専業主夫を経験した With you 編集委員・羽田修との対談パート2。前回（2002年9月15日号）は子育てのエピソードが中心でしたが、今回は男女共同参画に寄せる藤田さんの思いをご紹介します。



藤田健次さん

昭和14年鶴田町生まれ。平成11年八戸公共職業安定所所長を退職。在職中から、版画家・マンガ家・エッセイストとして活躍。著書「看護婦のオヤジがんばる」シリーズは映画化され、昭和55年度文化庁優秀映画賞を受賞。現在は、版画家として市内のアトリエで制作活動中。



With you 編集委員  
羽田 修

昭和47年広島市生まれ。大学卒業後、英会話学校に勤務。平成10年転勤により八戸に移住。妻は看護師。一時子育てのため専業主夫となる。現在は英語講師・ミュージシャン。

## 男も女もみな平等

私は1年間専業主夫として、家事・育児の楽しさをつらさと、そして重要さが本当によくわかりました。でも、自分の能力が全然使われず眠ってしまうのが嫌で、仕事をしたいという気持ちにもなりました。羽田さんと同じ気持ちを抱いている専業主婦の皆さんも多いと思います。私は「女性もすべて働くべきだ」という言い方はしません。「家事をしながらゆっくり子育て」

をするのが好き」という人がいれば、それはそれで素晴らしい人生で、反対に「一生働きたい」という女性がいても、これもまた当たり前です。そんな女性の気持ちを、社会も男性もみんな認めなければなりません。そして、このまま専業主婦を続けるか、働き出すかといったことを夫婦でよく話し合い、お互いに一番いいかたちを選択することが大切なんです。でも、こんなことを言うと「母親が家についてきちんと家庭を守らな

## 2003年も

## 看護師のオヤジがんばる

いから、非行が増えるんだ」という意見を言う人もいます。



子どもたちを見ると、共働きの

家庭の子どもだけではなく、専業主婦の家庭の子どももいます。ですから、それが理由にはならないと思います。そのことについて、私はわかりからいるいる言われて夫婦で話し合ったことがあります。子どもには寂しい思いをさせることもあるかもしれないけれども、自分たちが生き生きと人生を送り、できる限りの

ことを子どもたちのためにしてやるのが一番の教育じゃないかという結論に達しました。



人間一人ひとりの人生観は違っ

わけで、専業主婦をしながら生き生きとした人生を送っている人もたくさんいます。どんな選択にしても、自分の信じる道を胸を張って進んで、いい生きざまを見せてやれば、それが何よりの子育てだと思います。



そうですね。そのために「働きたい」「何かをしたい」とい

う意欲のある女性のために、社会の支援があるといいですね。

最近、整ってきた制度の中に育児休業制度がありますが、これは男性も取得できます。しかし、現実には誰でも自由に取得できるという状況にないのです。国がよい制度を整えても、社会との歩みがそろっていないのが現実です。

もし、藤田さんの時代に育児休業制度があったら取得していましたか。

二人とも朝出かけて夕方帰ってくる共働きだったら、取らなかったでしょうね。当時の私は、そんな考え方ができなかったと思います。たまたま妻が看護師で、夜勤のためいつも夜家にいなかったので、家事・育児をやらないうけにはい

待っ子  
帰校後を  
他人の家で  
待っ子等は  
ぎゅっと抱いてと  
われに求むる



「看護婦のオヤジ泣いて笑って」  
藤田健次者 より

なかったんです。そしてずっと後になって、やっとたどり着いたのが、

「男も女も同じ人間。平等なんだ」ということです。「藤田さんは、男女共同参画という言葉ができる前から、それを実践していたんですね」とよく言われましたが、同じ屋根の下に住んで、同じ8時間を外で働いて帰ってきて、一人はゆっくり休み、一人は忙しく家事をしていたら、それはおかしいでしょう。

炊事でも洗濯でも、夫・妻に関係なく、得意な分野を担当し合えばいいんです。夫の方が味覚がいいのなら、夫が食事を作ればいいんです。でも、これからの若い男性は、こだわりなく家事をこなしていくと思いますよ。羽田さんのようにやっている人は、結構いるんじゃないんですかね。ただ現状では、まだ「おれは家事をやっている」と外へ向かって言い出しにくいんですよ。

### 「男女共同参画」って？

「男女共同参画」を「家事は女性の仕事だ。なんで男性がしなくちゃいけないんだ。女性を甘やかしているだけじゃないか」と誤解している男性も多いようです。

そうですね。それによく「家事を手伝う」という表現をします

が、共働きをされていて「手伝う」という言い方はどうかと思えますね。

その言葉には、「家事の責任は妻にある。おれはちよっと手を貸してやっているだけ」という部分が見えますよね。

もし、「男性と女性の能力に差はない」という意識が昔からあり、あらゆる分野に女性が進出して

投入できたという点で、もっといい世の中になっていたのではないかと思えます。「女性だから」という理由だけで、その才能を發揮させる場を奪ってしまうのは、社会にとって大損です。男女共同参画は、「男性の知恵、女性の知恵」の両方を出し合うことによって、新しい花を咲かせることを期待していると私は思います。(おわり)

### 「男女共同参画社会を考えよう！」

#### ちよっと言わせて 五・七・五「コンクール」入選者に聞く

今回は、中学生の部・2008年の応募作品の中から最優秀賞を受賞した岩浪由果さん(現在・第一中2年)に、男女共同参画についてお話を伺いました。

#### 楽しさを 男女共同 倍にする

先生から、男女のコミュニケーションが取れていないことをよく指摘されます。確かにいつも、男子は男子、女子は女子で固まっていることを残念に思っていました。ですから「行事や部活動などを男女みんなで共同でがんばって、もっと楽しい学校生活を送ろうよ」という願いを込めてこの作品を考えました。

生徒会や子ども会のジュニアリーダーズクラブでも、男女の区別なくみんなを盛り立てられるようになりたいと常に考えて行動しています。でも、なかなかできません。そんな自分の反省も含め、身近から男女差別がなくなれば、学校生活がもっともっと楽しくなるのではないかと思っています。私の将来の夢は、保育士が学校の先生になることです。いろいろな経験を生かして、夢に向かってがんばりたいと思います。



## 知っていますか？ DV のこと

『DV』最近よく聞く言葉です。皆さんはご存じですか。急増するDVについて、八戸市福祉事務所家庭婦人等相談室でお話をお聞きしました。

### DV(ドメスティック・バイオレンス)って？

DVとは、配偶者やパートナー間の暴力のことをいいます。たとえば、内縁関係にある人・婚約者・恋人・以前に親密な関係にあった人から受ける暴力も含まれます。

DVには、身体的暴力のほかに、精神的暴力・性的暴力・経済的暴力・社会的暴力・子どもを巻き込んだ暴力などがあります。

精神的暴力には、侮辱的、差別的発言をしたり、意見を言わせない・外出の禁止・交友関係や電話内容の監視・大切な物品の破壊・夜通しの説教なども含まれます。

社会的暴力としては、実家や友人との付き合いの制限や禁止・就職活動の禁止などがあります。

どの暴力も、被害者の人権が侵害されています。被害者のほとんどは女性で、心身ともに傷つき苦しんでいます。決して許される行為ではありません。

### DVはなぜ起きるの？

DVが起こる背景には、人権の軽視、暴力を容認しがちな風潮や密室という特殊な条件などがあります。女性は、社会的・経済的に自立しにくい状況におかれており、さらに、家庭内のトラブルを公にすることを避ける環境が、暴力の被害を潜在化させる原因になっています。

暴力を加える側にも、相手を自分の所有物とみる意識や人権の軽視、またDVが犯罪であるという認識の無さなどの問題があげられます。

このように、男女の固定的な役割分担や経済力の格差、上下関係など男女がおかれている状況や性差別の意識が、DVが生じる要因になっています。

### DV相談の状況は？

当相談室におけるDVの相談件数は、平成12年度は21件、13年度は55件と大幅に増えています。全相談件数の一割にも満たない状況ですが、離婚問題にもDVが原因と思われるものがあり、この数は氷山の一角に過ぎません。相談できずに悩んでいる女性が多数いることが、大きな問題なのです。

### 保護命令とは？

「DV防止法・配偶者からの暴力の防止および被害者の保護に関する法

律」が平成13年10月13日に施行されました。配偶者からの暴力を犯罪行為と規定したものです。

被害者が、さらなる暴力により生命や身体に重大な危害を受けるおそれがある場合は、「保護命令」の申立てができます。命令には、被害者へのつきまといと、住居・勤務先等付近のはいかいを6か月間禁止する「接近禁止命令」と、住居から2週間の退去を命ずる「退去命令」の2種類があります。

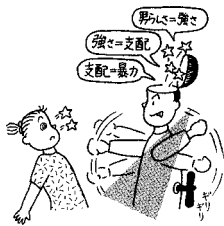
### 自分らしく生きるためには？

DV被害者の中には、繰り返し暴力を受け、恐怖や不安から無力感や自己嫌悪に陥り、現実の問題から逃避している人もいます。

被害者自身が、暴力との関係を断ち切る勇気を持たない限り、解決の扉は開きません。自分も悪いなどと暴力を正当化する理由はないのです。一人で抱え込まずに、まず相談をしてください。必ず、新しい道が見えてきます。

今の状況を変え、自分らしく生きるために、

関係機関も連携を取り合い、支援をしています。自立に向けた行動を始めましょう。



## もし、あなたが配偶者からの暴力に悩んでいたら、次の機関・施設等にご相談ください。あなたの力になってくれます。

殴る・けるといった身体的な暴力のほか、精神的な暴力についての相談・カウンセリング・一時保護・各種情報の提供などを行います。

- ◎配偶者暴力相談支援センター（県内に8か所設置されていますが、このコーナーでは3か所のみを紹介させていただきます）  
 青森県女性相談所 ☎ 017・781・2000（8:30～16:45／土・日・祝祭日・年末年始を除く）  
 青森県男女共同参画センター ☎ 017・732・1022（9:00～16:00／水・年末年始を除く）  
 三戸地方健康福祉子どもセンター福祉部 ☎ 0178・27・4435（8:30～16:45／土・日・祝祭日・年末年始を除く）
- ◎DVホットライン（24時間対応）女性相談所 ☎ 0120・87・3081
- ◎青森県警察本部子ども・女性保護対策室 ☎ 017・723・4211
- ◎八戸警察署生活安全課 ☎ 0178・43・4141
- ◎八戸市福祉事務所家庭婦人等相談室 ☎ 0178・43・2111（☎内線274）  
 （9:00～16:00／土・日・祝祭日・年末年始を除く）



男女共同参画

ワンポイント講座  
アンブリーダー会議に  
出席して

(内閣府主催・平成14年10月、東京)

「DV問題」の分科会に参加しました。これまで自分の身近でDV問題について聞くことがなかったので、DVに対して現実的な感覚がありませんでした。

しかし、被害者支援シエルトア(緊急一時保護施設)を開設した人やDV相談員が参加者の中にいて、具体的に話を聞くことができました。

まず、かなり多くの被害が発生していることに驚きました。程度の差はありますが、「DVにもある犯罪」という実感を得ました。また、DVがいかに表面に出て来にくいということも知りました。周囲の無理解や家庭内で孤立しやすい環境など、いろいろな理由で被害者はDVから抜け出せない状況にあるのです。少しでも多くの被害者が救われるためには、一人ひとりがDVに関する知識を身に付けていくしかないのだと感じました。

特に印象に残ったことは、シエルトアを開設し、仕事としてDVに携わっている女性が、「支援してきた被害者女性が、少しずつ立ち直り、生き生きとしてくるのを見ることが幸せだ」と報告していたことです。このように親身になって相談ののってくれる人がいるということが、被害者にとってとても心強いことだと感じました。

(羽田)

一人ひとりが生き生きと暮らせるまちをめざして

八戸市男女共同参画基本条例  
ワンポイント講座

◇基本理念◇

「社会における制度または慣行についての配慮」

性別による伝統的な役割は確かに存在しますが、それにとらわれずに人生を送ってきた人は今までにもいました。また、本当は自分らしく生きたいと願いながらも、「男だから」、「女だから」、「長男だから」、「妻だから」、「若いから」、「年を取っているから」と自分の意に添わない人生を送ってきた人も少なからずいたのではないのでしょうか。

会長は男の名誉職?!



男女共同参画は、平等な社会をめざす取り組みです。性別による役割や文化は、時代の移り変わりとともに常に変化し続けてきました。地域活動への参加、職業や学校を決めるときに、今までの伝統的価値観に縛られることなく、自分で考え行動することで、よりすばらしい人生を送ることができるのではないのでしょうか。

編集後記

男女共同参画は「一人ひとりが心から豊かに生きるため」の手段だと思えます。調和と活力に満ちた社会、世の中に生きる人全員が喜ぶことのできる社会が、結局は自分の幸せへの近道だと思うのです。非行やDVについて、みんなが関心を持つことが解決への近道なのかなと思うこのごろです。(工藤)

家事・子育てを二人で当然のようにがんばっている息子夫婦の共働き生活を見守る親として、両立することの大変さを知るとともに、喜びをも共有している二人をうらやましく思うことがある今の私です。(藤村)

えみこの読書日記

「男がスカートをはいたら、やっぱり変でしょ」と、高校生の娘が『こんなのへんかな』(小・中学生向き絵本/村瀬幸浩・作)を見ながら当然という顔で言いました。そこには、かわいらしいスカートをはいた男の子が、サッカーボールを持っている絵がありました。



昔から、男性はスカートをはかないものだと多くの人は思っています。しかし、スコットランドやインドネシアなどの国で、民俗衣装のスカートを着用している男性の姿に違和感はありません。なぜ私たちは、スカートをはく男性に違和感を持つようになったのでしょうか。

いつのころからかわかりませんが、「男なら泣くな」とか「女だからおとなしく」などの『枠』をはめるようになりました。最初から枠をはめられると窮屈です。子どもたちの大好きなマンガやテレビCM、学校生活など自分たちの身近にも『枠』があります。それにとらわれずに『自分らしい自分』を考えてみようよと、この本は語っています。

「自分らしくすること」と「自分勝手」とは違います。相手の立場になって考えることができこそその「自分らしさ」です。相手との違いを理解して認め合い、お互いを補い合っていけるのが、男女共同参画社会なのだと思つたひとときでした。



この記事は、一般公募で選ばれた皆さんが作成・編集しています。

今期の編集委員は、赤坂さん・羽田さん・工藤さん・藤村さんです。

お問い合わせ 生活・交通安全課 男女共同参画班 (☎内線 485)